

「頼ることと頼られること」

前号のこの欄で、最後に英文で引用した文章は、

砂の上の足跡 Footprint in the Sand

からの抜粋であった。多少長くなるがその全文の訳を以下に引用する (bold 体の部分が、前回引用した一節である):

ある晩、男が夢をみていた。夢の中で彼は、神と並んで浜辺を歩いているのだった。そして空の向こうには、彼のこれまでの人生が映し出されては消えていった。どの場面でも、砂の上にはふたりの足跡が残されていた。ひとつは彼自身のもの、もうひとつは神のものだった。人生のつい先ほどの場面が目の前から消えていくと、彼はふりかえり、砂の上の足跡を眺めた。すると彼の人生の道程には、ひとりの足跡しか残っていない場所が、いくつもあるのだった。しかもそれは、彼の人生の中でも、特につらく、悲しいときに起きているのだった。すっかり悩んでしまった彼は、神にそのことをたずねてみた。

「神よ、私があなただけに従って生きると決めたとき、あなたはずっと私とともに歩いてくださるとおっしゃられた。しかし、私の人生のもっとも困難なときには、いつもひとりの足跡しか残っていないではありませんか。私が一番にあなたを必要としたときに、

なぜあなたは私を見捨てられたのですか」

神は答えられた。「わが子よ。私の大切な子供よ。私はあなたを愛している。私はあなたを見捨てはしない。あなたの試練と苦しみのおきに、ひとりの足跡しか残されていないのは、その時はわたしがあなたを背負って歩いていたのだ」

作者不詳

心が温まるよい話だと思う。ここで「神」と呼ばれている存在を認めるか認めないか、に関わらず、何らかの感動を呼ぶ文章だとも思う。この文を掲載してある webpage 「砂の上の足跡」<http://www.ieji.org/archive/footprints-in-the-sand.html> では「霊的 (spiritual) な詩」という言い方がされている。

しかし、何かもの足りない気がするのは、筆者が不信心な故か、それとも単にヘソマガリなせいなのか。「神」の愛に包まれて生きることが、生のすべてを決定し、それこそが生きることの意味なのだ、と主張する人々もいるであろう。しかし、その「抱擁」は一方通行であろうか。「包む」と「包まれる」という能動・受動の関係であれば、未来永劫「神の人への愛」が能動 active であり、人は常に受動的 passive であることになる。

相手が「神」では話が大きすぎる。「自分を庇護する (してくれる) 存在」と「庇護されている自分」という言い方に変えよう。あるいは「頼りにされる側」と「頼る側」と言ってもよい。

頼られる側にそれなりの責任があるのはもちろんであるが、頼る側は頼るだけでいいのか?

* Group Epsilon 名誉顧問, Acta Epsilonica 主筆.

頼る側にも何らかの義務、責任があるのではないか？ 権利ばかりを主張し、自己の責任を全うしない「オシエテ君」と「オシエテさん」ばかりが web に蔓延っている今日、この間にはそれなりに意味があるはずだよな.....

そんなことを、ボヤーッと考えていた先日(つい最近)のことである。鷺田清一氏による朝日新聞朝刊のコラム「折々のことば」(2016/09/29 Wed 第1面)に次の文章があるのを目にした:

ほんとうの寛容さはつねに戦闘状態にあるはずで、寛容にする側もされる側も、どちらもぞんぶんに傷つく。 堀江 敏幸

他人の話に「わかる」と人はたやすく返すが、この優しさは皮相のものだ。そこから発生する事態をともに担う気のない「わかる」はむしろ冷淡であり、簡単にわかられてたまるかという反発を招く。「わかる」「わからない」と言うとき、人は「自分を棚にあげない勇気の有無」が問われるのだと作家は言う。 小説「河岸忘日抄」から。

「あちゃ、この小説、読んだのに.....」という悔しい思いと、鷺田先生への深いジェラシミを存分に味わった一時でした。

NOTE. 「砂の上の足跡」については著作権の問題があるようです。もし引用などをしようと思う方は、先に上げた web page の末尾部分を読んで下さい。

そして、この話を web に載せて、日本語訳をつけてくれた page の作者に感謝します。

次号 Vol. 2, No. 1 では、次の KOTOBA — ΛΟΓΟΣ — 言葉を探り上げます:

..... やい本! きさまは嘘つきだ。まったくの話、きさまら本は身の程を知らねえ。きさまらはただの言葉と事実をくれるだけだが、おれたちは思想を貰おうと思ってやって来てるんだ.....

さて、出典はなんでしょう。みなさんは全員、絵本や子供向きの書物で読んだことがあるはずです。